

資料情報公開の
意外な落とし穴

「情報公開」に偏ったシステムを構築すると
逆に公開は滞ってしまう…という本末転倒。

博物館資料の情報発信の難しさ

収蔵品管理システムを導入し、数万点のデータがシステムに登録されているにもかかわらず、実際に公開できているのは数百点のみ——という施設は、実は多数存在します。

理由は「そのデータを本当に公開して良いか」について検証するのに相当の手間がかかるため。情報の正確性だけでなく、個人情報や差別的表現の有無、肖像権や著作権の問題などをすべてクリアしなければ、公的機関の公開データとして相応しくありません。

データ内容の点検・検証作業は日常業務に加えて行わなければならないため、**公開＝業務の激増**という図式が成り立ちます。こうした理由から、すべてを公開している館はごく一部に留まっているのです。

とは言え、公共機関としての情報公開、またインターネットの活用はもはや不可欠。業務の増加に関係なく実施を求められているのが現状です。

業務と公開を分けないこと

一方、デジタルデータの作成作業や情報の検証作業は、実はデータを公開していない館でも日常的に行われている業務でもあります。資料を展示する際、目録を作成する際、年報や紀要を作成する際などに、写真撮影や解説の執筆、情報内容の確認を行っているはず。

これらの日常業務が情報公開業務と自然につながっていれば、仕事をこなすうちに公開できるデータが勝手に蓄積していくことになります。

従って、博物館における館内システムは、日常業務と公開（外部発信）業務を一体化できるものであるべきです。業務システムと公開システムが別物であった場合、日々の仕事とは別に公開用データを改めて作る作業を発生させることになるため、仕事が増えてしまいます。また、公開システムだけを導入した場合には、業務システムによる業務負担軽減効果を望めないまま「仕事の純増」だけを被ることになるため、業務品質も改善されず、結局は公開もうまくいかない…という最悪の結果になる可能性すらあります。

業務&公開が一体となったシステムを構築すれば、**業務システムで公開情報作成（精査）の余力を捻出し、かつ「副産物として」公開用データを蓄積できる。**資料情報公開の成功のポイントは、実はシステムの構築方法にあるのです。

